

被災地の復興から築く平和のとりで

横浜市立高田小学校 教諭 今村 俊輔

lmashun0510@gmail.com

キーワード：総合的な学習と国語科の連携、プレゼンテーション、キューブキッズ4、Skype

1. はじめに

本実践のきっかけは、被災した気仙沼市立九条小学校と、交流を始めたことであった。はじめの交流は、株式会社ポケモンの支援を受けての、文通のやりとりであった。活動の過程で、なんのための文通なのか、子どもたちが議論し、「自分たちになにかできることはないか」考えた。そして、共に活動することで、被災地の友達を元気づけようということになり、復興に向けた「オリジナルソングづくり、モザイクアートづくり、大漁旗づくり」の3つの案を九条小学校の友達にプレゼンテーションした。プレゼンテーションをつくる学習は、国語科で「被災地の復興から築く平和のとりで」に取り組んだ。子どもたちは、プレゼンテーションの提案に賛同し、3つのグループに分かれて活動に取り組んだ。

このように、本実践は、総合的な学習の時間と国語科の連携単元である。

2. 実践の概要

単元名 被災地の復興から築く平和のとりで

資料 「自主教材（震災や復興についての資料）」

学年 第6学年

指導事項 「話すこと・聞くこと」

- (1) ア 考えたことや伝えたいことなどから話題を決め収集した知識や情報と関係付けること。
- イ 目的や意図に応じて事柄が明確に伝わるように話の構成を工夫しながら、場に応じた適切な言葉遣いで話すこと。

事項 イ (ア) 話し言葉と書き言葉との違いに気付くこと。

言語活動 資料を提示しながら説明や報告をしたり、それらを聞いて助言や提案をしたりすること。(●プレゼンテーション)

単元の目標

- 被災地復興のために被災地の友達を勇気づけ、共に歩んでいけるように、「被災地復興から築く平和のとりで」について自分の考えをまとめようとする。
- 自分が考える復興について、資料や具体例を集め、意図を明確に伝えるための話の構成を工夫し、プレゼンテーションする。

3. 単元計画

時	学習活動
0	総合的な学習の時間で被災地の現状や人々の思いについて考える。
1	九条小の友達と自分たちが一緒にできることを決め、グループをつくる。友達と共に復興の道を歩んでいくために復興支援の方法について、九条小の子にプレゼンテーションで伝えることを知り、学習に取り組んでいく。
2	復興の資料を参考にした教師のモデルプレゼンテーションから話の構成や資料の使い方について読み取る。

3	スライドを作成するための写真を決め、プレゼンテーションの構成を考える。
4	自分の意見の根拠を集めるために、被災地の友達に Skype で取材をする。
5	メモをもとに「被災地復興から築く平和のとりで」について400字程度の発表原稿を書く。
6	自分たちのプレゼンテーションから予想される反対意見とそれに対する考えについて話し合う。
7	反論と対策について話し合った内容をふまえてグループで一つのプレゼンテーションを作成する。
8	クラス全体に向けてプレゼンテーションし、意図が明確になるように意見交流をする。写真①
9	クラスのみんなのアドバイスを受けてプレゼンテーションを修正する。
10	九条小のみんなにプレゼンテーションをする。九条小の友達に心の復興に向けて一緒に取り組む活動を決めてもらい、意見交流をする。



写真① 友達に向けてプレゼンテーションをする。

4. 実践の特徴・ねらい・工夫

4. 1 総合的な学習の時間と国語科の連携

この実践の大きな特徴は、総合的な学習の時間と国語科を連携させて授業したことにある。連携させることで、ダイナミックに単元を構成することができた。被災地の友達を勇気づけ、共に歩んでいけるようにするために、オリジナルソング、モザイクアート、大漁旗の3つの活動に取り組んだ。その活動のプレゼンテーションを行う手段を国語科で学ぶことができた。

4. 2 思考の流れの可視化

写真②は、ホワイトボードを使って、自分たちが調べたことや考えを共有し、決定している場面である。思考が見える化することで、議論が絡み合い、グループで納得のいく原案をつくることができた。



写真② ホワイトボードミーティング

4. 3 相手意識をしっかりとつこと

相手意識をもつことを重視した。九条小の友達が、どんな思いなのか状況なのか知るために手紙や Skype で交流を繰り返し、相手を考えたプレゼンテーションになるようにした。

5. ICT 活用の工夫

5. 1 デジタルとアナログを効果的につなぐ

プレゼンテーションを作成するときに使用した構成メモを、デジタルテレビに拡大することで、子どもたちの思考を共有した。プレゼンテーションの修正の視点をもったり、友達のよさを見出したりするのに効果的であった。

5. 2 映像メディアの活用

プレゼンテーションソフトを活用することで、写真や図、文章の修正などを簡単に変更することができ、自分たちの意図を伝えるために具体的な検討ができた。

自分の提案と映像を結びつけて、聞き手を引きつけるプレゼンテーションをすることができた。

写真③
プレゼンテーション
ソフトを用いての
プレゼンの作成

5. 3 Skype を用いての交流会

両校が協力して作成した、モザイクアート、大漁旗を見せて、完成を喜び合った。そして最後には、テレビ画面を通してオリジナルソング「絆」を一緒に歌った。九条小との最後の交流会で、真剣に語った言葉は、Skype で相手の表情を見て、交流したからこそ、互いの心に響く内容であった。

6. 実践の成果

この実践を始めた 2012 年 9 月は、震災から一年半たった。高田小の子どもたちは、東北の復興は、ほとんど終わっているものだと考えていて、私が、2012 年 10 月に九条小学校を訪問したとき、横浜の子の復興への意識を伝えると、「海の周りは、少しも変

わってないよ。」と苦笑いしていた九条小の子が印象的であった。このように、交流を始めたときは、九条小と高田小の子どもたちの復興への意識に、当然ではあるが、差があった。

しかし、被災地について問題意識をもって学習を進めたり、交流を繰り返したりする中で、高田小の子どもたちの復興に対する意識が変わってきた。それは、被災地の現状を知ったからというだけではなく、名前や顔を知っている被災地の友達が、困っていることに対して「何かできることはないか？」と自分ごととして考えたからだと思う。

2012 年 12 月 7 日に、震度 5 弱の地震が東北地方で起き、気仙沼では津波警報が発令された。この 3 日後には、完成したプレゼンテーションをする予定であったが、地震にあったばかりの気仙沼の友達の気持ちを考え、プレゼンテーションをもう一度考え直した。私の問いかけに、沈黙が続いたが、子どもたちの中から、「もっと勇気づける、元気づける写真を使おう。」という意見が出てきた。多くの時間をかけて、完成させたプレゼンテーションを修正することになったが、進んで活動に取り組んでいた。プレゼンテーションしたことは、現実になり、高田小と九条小が共にあゆむための活動へと変わった。

活動の成果物である「オリジナルソング・モザイクアート・大漁旗」について述べる。

オリジナルソングづくりでは、歌詞に入れたい言葉などをメールやファックスでやり取りし、1・2 番を高田小学校の子どもたちが作成し、その歌詞に答えるように、3 番の歌詞を九条小の子どもたちが作成した。できあがった歌詞に曲をつけて、完成した曲を Skype で一緒に歌った。

モザイクアートづくりでは、両校の笑顔の写真を集め、写真で、気仙沼名物のフカヒレ(サメ)を描いた。遠目から見るとサメのデザインが見えて、近くから見ると、子どもたちの笑顔の写真が見えた。

大漁旗づくりでは、気仙沼の漁業の復興を祈り、サメの大漁旗をつくった。大漁旗のデザインを Skype やメールでやり取りし、両校で色を塗った。完成後の旗は、九条小学校によって気仙沼の「さかなの駅」に寄贈された。

7. 今後に向けて

ICT は距離や時間を縮めてくれる道具である。今回は、被災地の子ども達との交流を可能にしてくれた。

世の中を見てみると、遠くの人とすぐに連絡を取ること、特別なことではなく、当たり前のように行われている。また、Facebook や LINE など便利なアプリであふれている。

これらの道具を効果的に使い、社会貢献できたら素晴らしいことだ。

本単元の活動を通して、社会のために活動する大切さに触れることができていたのであれば、嬉しい限りである。そして、未来を担う子どもたちを育てる教師として、社会や地域と子どもをつなぎ、価値ある活動を授業に組み込んで行きたい。そこに、ICT は大きな役割を果たしてくれるであろう。